



2003年

**SORA** 3号

晴夜 (3) | 1

柴田 佐知子

葉桜の上に正午の時計台  
すいば嚙み村で一番強き子ぞ  
瀧壺にしぶきて瀧の収まらず  
胴に入る竹刀の音や楠若葉

一礼のあと涼風の渡りけり  
大牛が太鼓となりぬ青嵐  
拝したる神のうしろに蝮草  
血族の寄り来てすぐに素足なる  
白壁に雨の筋あり百日紅  
籠枕より離れきし頬らしき

東方は賢き方や青葡萄

# 道

高倉 和子

大空に道あり雲雀揚がりけり

虫干しの中より父の出てきたる

濡れ髪の重さに螢飛びにけり

愛されて人に従ふ金魚玉

どくだみの伸びたる家を壊しけり

日除けして骨董市の始まれり



一滴もこぼさぬやうに清水くむ

夏帯の母を遠しと思ひし日も

兜虫闘ふ色となりにけり

戦場にカメラを据ゑし夏の月

正面の山影太し水を打つ

ゆらゆらと日向を來たる金魚売り

噴水の回りを子らのただ走る

雲ひとつかかりてゐたる投網かな

雨の匂ひ残る山なり葉掘る

俳句をはじめてもう何度季節が巡つただろうか。しかし改めて歳時記をめくると実際に経験したことのないもの、目にしたことのない動物や植物が意外に多いことに気付く。都会に暮す者にとって自分の生活に根付いた季語は限られているのかも知れない。

私にとって両親の暮す豊かな自然が残るふるさとが俳句の原点でもあり、拠り所でもある。大切に詠んでいきたいと思う。

## 土用波

あさなが捷

隣より泳いできたる鯉幟

真つ先に薔薇の花束さし出さる

泳ぎきてしばらく声を忘じけり

クレマチス思ひを告ぐる間もなく

荒れし庭より天牛の出てきたる

しばらくは言葉そぐはぬ帰省の子



縄を緇ふことより祭はじまれり

傾きしままの鶏小屋瓜の花

水中花心変はりを責めるなど

土用波に大岩胸を貸してをり

身を反らすプリマのポーズ百合白し

暑気中り悪事を悔いてゐたりする

つなぎたる手のままに入る踊の輪

数へあげ子を追ひつめし秋暑かな

天罰のあたらぬ不思議芙蓉の実

何の話からか、息子が突然「幼稚園に入つてすぐ、みんなが犬のことをワンワンって言ったから驚いた。」と言うのです。

初めて聞く話です。それで思い出したのですが、息子が小さい頃、幼児語や方言、乱暴な言葉などは自然に覚えるものだから、家の中では出来るだけ美しい日本語をインプットしようと気負っていたことがありました。

これは彼一流のユーモアなのか、最初にうけたカルチャーショックだったのか気になるのですが、生れてはじめて親から離れ、近所の子がひとりもない幼稚園で緊張して過ごしていたのであるうと想像がつくだけに、もう一度聞くことができません。

ちなみに、我が家では現在、今宿風博多弁が飛び交っているのは言うまでもありませんが、真っ黒に日焼けして、山猿のように野山をかけ回っている息子は、入園するまで本当にワンワンを知らなかったのでしょうか。やはり疑問です。

## 汝に蹤かむ

荒井千佐代

芒種かな舳綱にあをき草絡み

夕潮の檣の花に触れて差す

朴咲きて亡父の方位磁石かな

夏めくや隣村まで磯づたひ

漁業組合裏の浜荘梅青む

傷心のをのこ連れ出す螢狩



凌霄花五十路半ばをうつうつと

首筋に西日はりつきルルド坂

無原罪の聖母に落つる栗の花

真夜磨く白靴明日も汝に躓かむ

泉にて二号農道ゆきどまり

後部座席に夫助手席に夏あざみ

十戒の第五真黒きぶだう食む

屍待つ土葬の穴や大夕焼

夏終る燭台長き影曳きて

「十戒の第五」とはへなんじ殺すなか  
れである。

最近痛ましい事件が続いている。三人  
の男子を持つ私は悲しくてならない。

「殺す」の意味は深い。私自身は人を  
殺していないか。「殺す」に価する行動  
をとっていないか。

黙。

跪き頭を垂れるのみである。

## 仙翁花

高 千夏子

初秋や以外に硬き嬰の爪

刈安の葉もて刈安束ねをり

吾亦紅うらおもてなく暮れにけり

緑陰にぎらつく眸解かずをり

八月や抱き疲れの歓喜天

靴脱ぎて汽車に座るや田水沸く



青すだれ愒気諍ひつつぬけに

夏書きする中のひとりは左利き

男など知らぬ身でよし仙翁花

捕虫網黄ばみてよりの戦果かな

母 体調不振にて入院 五旬

精密検査息つめて見る水中花

検査結果すべて良好金玉糖

ただ六日入院の間の七変化

杖の身を嘆けば

牛歩でも母よ涼しく歩むべし

老鶯に長寿の願ひ託しけり

青山俊董尼。愛知専門尼僧堂堂長で、

長野県塩尻市の無量寺の住職も勤める高僧。この鄙びた野の寺の須弥壇前の柱。

異様とも崇高とも感じる。何と金欄綴子の花嫁衣裳を二本柱に巻いてある。五歳で仏門に入ったわが子の為、着ることも無いのを承知で里の母親が蚕を飼い、自ら織り上げたものとの事。宗教書の他、茶道、華道の著作まである俊董尼。文は頂戴したことはあるが、お目にかかったことのないこの尼に仙翁花は誠に相応しい。